

杉村広蔵とシュンペーター

塩 野 谷 祐 一

昭和25年に出た『杉村広蔵博士を憶う』という論集の中に、田中正司先生がおそらく最年少者として一文を寄せている。先生は昭和24年東京商大卒であるから、この文章は先生の最も初期のものに違いない。題して「最後の講義」という。杉村広蔵は昭和11年5月、白票事件により東京商大の助教授を辞任し、大学を去ったが、それからちょうど10年目の昭和21年5月、講師として大学に復帰し、以後死去までの2年間経済哲学の講義を担当した。田中先生の一文は、当時一年生であった先生が杉村の開講の日に覚えた感動を綴ったものである。その田中先生も定年を迎え退官された。杉村の「最後の講義」は40年も前のことである。

杉村のこの開講の辞は「左右田博士の学者的風格」として『一橋論叢』（昭和23年11月）に収められている。苦衷の10年の後、再び母校の教壇に立った杉村は、おそらく万感胸に迫る思いに浸ったであろう。しかし、その日、彼はむしろ30年前の昔、東京高商予科一年生として、大学創立40周年の記念講演において、恩師左右田喜一郎の「カント認識論と純理経済学」（大正4年）とい

う講演から受けた深い感動について語ったのである。杉村は左右田を「思想を持った人、方法を持った人」と述べた。「方法なくしては学問はない」という杉村の信念は、東京商科大学「教授会を通過せざりし論文」の序に強く表明されていた。杉村は開講に当り左右田を語ることによって、自己の信念を改めて確認したかったのであろう。

さて、上述の『一橋論叢』は杉村追悼のために編集されたものであって、彼のもう一つの論文を遺稿として掲載している。それは「西洋経済学史序説」という題名のものである。杉村は戦後ある出版社の企画した講座の一冊として、『西洋経済学史』の執筆を始めたが、この序説を書き残したにすぎない。彼が戦後の段階においてどのようなスタイルの書物を書く予定であったかは、大変興味をそそる問題である。もちろん、彼は経済哲学に関するいくつかの書物のほかに、すでに経済学の歴史に関する研究を発表していた。彼はこれらの研究において、経済学史というものがいかなる論理のもとに成立するかを真剣に問うたのである。なかでも「哲学と経済学との交渉」（岩波講座『哲学』昭和7年）および『経済学方法史』（理想社、昭和13年）は彼自身の強い個性を示した経済学史の書物である。ただ後者をとってみても、それはスミスとメンガーを重点的に取り上げているにすぎず、経済学史の試みとしては素描にとどまっている。それだけに、戦後の新しい書物における一層の展開が期待されたのである。

彼の主張によれば、学説の単なる年代記は骨董陳列や系図調べのようなものであって、精神なき形骸にすぎず、生ける学史を構成するためには、方法をめぐる哲学的反省がなくてはならない。その目的に応ずるものとして、彼は方法史という概念を提起したのである。そのさい、学説史（Dogmengeschichte）と方法史（Methodengeschichte）とが結びついて学史を形成すると見なされた。学説史が歴史的に経済学における外向的な対象構成の試みを扱うとすれば、方法史は哲学的に経済学における内向的な自己分析の試みにかかわる。学史は学説という具体的な経験的素材を通じて科学の方法を明らかにするものであって、経済学史は経済学と哲学とを媒介するものとなる。いいかえれば、経済哲学の問題は経済学史を通じて最もよく具体化されるのである。

この杉村の問題提起は今日依然として新鮮な意味を持っている。現在でも経済学史の接近方法をめぐって、絶対主義的接近と相対主義的接近という昔からの二分法が行われているが、最近の科学哲学における多彩な展開は科学史に対するそのような見方を許さなくなっている。科学史に登場する多元的な諸学説は、異なった方法論の実践例にはほかならないのであって、科学哲学や方法論の観点なしに学史叙述を試みることはできない。杉村は経済学史を「経済学意識の自覚過程」とか「経済学意識の体系的合理化」とか「経済学思想の成長発展を跡づくべき認識秩序」とみなしているが、それは歴史的に形成された経済学に対する哲学的考察にはほかならない。経済哲学の内容は、具体的には、方法論、価値論、形而上学を含むが、杉村はそのなかで特に経済学意識における世界観を強調したのであって、イギリス・フランスの実証主義とドイツの理念主義とを世界観の二本の柱とした。通常の学史研究における時代区分が学問の流れを横に断ち切るものであるとすれば、世界観の区分はこれを縦に仕切ることになるという。彼は前者についてでなく、後者について学派を語ることに意味があると主張した。

上述の学説史と方法史の区別が、シュンペーターの初期の著作である *Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte* (1914) から示唆を受けていることは明らかである。しかし、杉村は同時に、シュンペーターに強く反撥した。杉村はシュンペーターのこの書物を、オトマール・シュパンの *Die Haupttheorie der Volkswirtschaftslehre auf dogmengeschichtlicher Grundlage* (1911) と並んで、自分の観点からみて挙げるに値する数少ない書物として評価しているものの、彼のどの書物や論

文においてもシュンペーターの学史の方法を丹念に検討してはいない。ただ杉村はシュンペーターの「学派」についての見解に対して強い関心を示し、詳細な論評を加えた。上で言及した杉村の遺稿「西洋経済学史序説」は、上述したような経済学史の概念を改めて提起するとともに、方法史の観点からの学史研究においては学派の概念は不可欠であると論じ、「経済学に学派なし」というシュンペーターの見解を批判したのである。杉村はそこで具体的に、実証主義対理念主義および客観主義対主観主義という二重の基準によって、学派の位置づけを試みている。

シュンペーターの見解によれば、知識社会学に属する現象として、学問は指導的役割を演ずる学者を中心とする学派によって担われ、さまざまな学派の競合関係の中で形成されていく。しかし、それを別とすれば、経済学の基礎的立場については相違はありえず、したがって学派の成立する余地はないというのが彼の主張である。現実には存在する学派として、政治的、党派的立場に基づくものや、哲学的、形而上学的立場に基づくものがあるが、政治や哲学は経済学の命題とは無関係であって、それらは経済学の学派とはいえない。また、方法の相違に基づく学派の存在はもっともらしく見えるけれども、メンガーとシュモラーとの間の方法論争に見られるように、結局、違う問題に対して違う方法が妥当するという形で融和しうるものであって、文脈の違いを学問上の対立と見なすのは馬鹿げている。

このようなシュンペーターの見解を最もはっきりと示しているのは、彼が日本を訪問したさいに行った神戸商大での講演である。それは“The Present State of Economics, or on Systems, Schools and Methods”（『国民経済雑誌』昭和6年5月）として発表されている。この論文の基になった講演原稿は、最近になって“Recent Developments of Political Economy”（*Kobe University Economic Review*, 1982）として発表された。彼が「経済学に学派なし」という意味は、政治的党派性や形而上学的思弁から独立した経済学は、十分な発展のための時間をおいて見るならば、同質的な問題領域については共通の理論を持つということである。

杉村は二つの点についてシュンペーターを批判している。第1に、たとえシュンペーターのいうことが科学の究極的な姿として正しいとしても、歴史的な過程においては実現されない。したがって学派は歴史上の概念として成立する。第2に、経済学史上の概念として見るとき、学派は外見上の学者集団についてでなく、世界観的方法を中心にして構成されるべきものである。

じつは杉村はかなり以前に、上述の遺稿とは別のところで、学派についてのシュンペーター批判を行っている。それは「経済学に学派はない」（『一橋新聞』昭和6年7月25日）であって、上述の『国民経済雑誌』におけるシュンペーターの論文を対象としたものである。一橋大学図書館所蔵の『国民経済雑誌』を見ると、シュンペーターの論文の最後のところに誰かの鉛筆による書き込みがある。いわく、「Schumpeterノ主張ニモ不拘吾人ハ世界観ニヨル学派ノ存在ヲ認メザルヲ得ズ。之ニツイテハSch.氏ハ一言ヲモイフ資格ナシ」これは私の知る限りでの杉村の筆跡に極めてよく似ているように思えた。杉村の高弟、馬場啓之助先生に意見を求めたところ、間違いのないという判定であった。

私は杉村の見解は正しいと思うし、それは論理実証主義の科学哲学に対するその後の批判を先取りするものであった。杉村の第1点は、論理実証主義が理論を静的構造として「正当化の文脈」においてのみとらえるのに対して、時間的展開の中で「発見の文脈」においてもとらえる必要があるということに等しいし、第2点は、理論構成における世界観の位置や影響を重要視することに等しい。しかし、シュンペーターに対してこのような批判を向けることは正当であったであろうか。

シュンペーターについては、一般に、純粋経済学の学者というイメージが作られている。第2

次大戦前においては特にそうであった。たしかに、彼が経済学に関して政治的イデオロギーや政策論議や方法論議を排撃している文章を見出すことは簡単にできる。彼を一枚岩の実証主義者のように思わせるだけの証拠を、彼自身がふんだんに提供しているから、ひとびとがそう思うのも無理はない。しかし、それがシュンペーターのすべてではない。杉村の炯眼をもってしても、シュンペーターの正体を見抜くことができなかったようである。かりに杉村の分類をとると、シュンペーターのローザンヌ学派への傾斜から判断すれば、シュンペーターは実証主義の世界観のもとの客観主義の見地に立つことになる。しかし、彼はオーストリー学派から出発し、歴史学派の遺産をも受け継ごうとしたのであって、これらの両学派は、杉村の分類にしたがえば、理念主義のもとにおける主観主義と客観主義とを代表している。またシュンペーターがマルクスの学問に深い共感を抱いたことをも考えると、彼における理念主義の要素はきわめて強いといわざるをえない。

経済学史の接近方法の問題に立ち帰ると、シュンペーターは学史を書くに当って、けっして学派の概念を無用としたのではない。それは、シュンペーターにとってむしろ本質的な要素であった。彼の学史の書き方は、社会全体についての彼の見方に基づいている。それによれば、社会のさまざまな分野、たとえば経済、政治、法律、芸術、学問、技術、宗教などは、本来統一的な全体であったものを、学者がそれぞれの分野に秩序を想定し、恣意的に構成したものすぎない。各分野についてそれを特徴づける固有の人間類型が仮定され、それらの人間の適応行動によってまず各分野に静態的均衡の秩序が描かれる。次に、既存の秩序を破壊し、新しい秩序を導入する革新的創造者が現われ、それによって各分野の動態的發展が生み出されるとみる。最後に、別々に取り扱われた各分野の相互交渉をとらえることによって、社会全体の統一的な動きを理解することができる。これをシュンペーターは「総合的社会科学」と呼んだ。彼が生涯を通じて見せたいくつかのパラドキシカルな言説は、彼が社会像の一部を見ているのか、全体像を見ているのかの違いによって説明できるのである。彼は *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung* (1912) の第7章（「国民経済の全体像」）において、この構想を「総合的社会科学」のプログラムとして提起したが、第2版以後些細な理由のために削除した。そのため第2版を利用している日本語訳も英語訳もこの構想を伝えていない。この構想を実現することによって、シュンペーターはマルクスの唯物史観や歴史学派の歴史研究による「総合的社会科学」と対抗しようと考えたのである。

さて、経済学研究という分野も当然この枠組みの中にある。ある大きな学説（パラダイム）の支配がこの分野の静態的均衡を表わし、革新的な学者による新しい学説の提起とそれに従う信奉者の群生が動態的發展を表わすのである。シュンペーターは経済発展における企業者の役割を強調したことで広く知られているが、それと同じ役割が、学派を形成するほどの指導的学者に帰せしめられた。彼は「一人の指導者、一つの学説、人的結合、一つの中核、勢力圏、周辺圏を持ったもの」を真の学派と呼んだ。杉村は、シュンペーターが認めたこのような社会現象としての学派を、単なる外見上のものと見て軽視したが、シュンペーターにとっては、それこそが経済学を歴史的に形成していく具体的過程であった。この学派形成に当たって、杉村が強調したような世界観的方法が役割を演ずることは、クーンのパラダイム論やシュンペーター自身のイデオロギー論に照らしても明らかである。したがって、杉村のシュンペーター批判の二つの点はともに、社会現象としての学派を考えるシュンペーターによって受け入れられていたといつてよい。

問題点は次のように表現できよう。杉村の恩師である左右田の言葉を借りていえば、シュンペーターの「経済学に学派なし」という命題は、科学活動の極限概念として理解しうるものではないか。

その命題は、究極的極限状態としてとらえられた規範的科学像である。他方、歴史的、社会的状況の中で行われる現実の科学活動を対象とする科学史の方法は、科学の目標や基準から独立でありうる。このような科学と科学史との関係は現代の科学哲学の特徴的な考え方となっているが、シュンペーターは学史研究において、「総合的社会科学」の構想に基づいてこの知識社会学的立場に到達したのであって、最近の科学哲学に見られるように、理論の一義的非決定性の認識とか方法多元論の主張とかに基づくものではない。このようにして、シュンペーターは「経済学に学派なし」と言いながら、学史研究においては学派を語ることができたのである。それに対して、杉村は極限概念としての科学についても、世界観の相違を含んだものを科学と見なしたのであって、科学史の方法もそれに沿ったものであった。二人の間に極限概念の把握の違いがあることが分かるが、シュンペーターならばおそらくこう言ったに違いない。科学像の極限概念に関して世界観の相違があるにもかかわらず、実際に同じような学史記述ができることが重要である、と。

シュンペーターの晩年の学説史研究は、膨大な *History of Economic Analysis* (1954) として刊行された。杉村はこれを見ることができなかったが、この書物も学派の観点を排除したものではなかった。じつは、ここにも人々を惑わせるパラドキシカルな問題が含まれている。シュンペーターはこの書物において経済思想の分析的ないし科学的側面を書くと宣言し、『経済分析の歴史』という題名を掲げたのであったが、実際には、経済学が存在するはずのないギリシャ・ローマを論じ、多様な学派を論じ、時代精神を論じ、社会的、政治的狀況を論じ、周辺の学問を論じたのである。「経済学に学派なし」という命題をうのみにすれば、これらの論題は経済学にとってまったく外生的な要因であって、捨象すべきものであるに違いない。あるアメリカの学者は、この大著について科学的分析を扱っている章と、それ以外のものを扱っている章とを分け、前者はページ数で見て全体の40パーセントにすぎず、後者は60パーセントにも及んでいると報告している。しかし、これは謎でも矛盾でもない。シュンペーターにとって一つの社会的分野の歴史を書くことは、他の分野との相互交渉を明らかにすることでなければならなかった。歴史を論ずるさいには、個々の分野を論ずるときに許された他の外生的事情を所与とみなす想定はもはや許されないからである。

歴史といえば、歴史についての杉村の見方を端的に表わしている一つのエピソードがある。上述の筆跡が杉村のものだとすれば、私はこれまでに一橋大学図書館の蔵書の中でときどき同じ落書に相遭することがあった。ドイツ歴史学派の指導者シュモラーの *Grundriß der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre* (1901-4) は、理論化された歴史の集大成の試みであり、シュンペーターはマルクスと並んでシュモラーの接近方法を「総合的社会科学」の試みとして高く評価した。シュンペーターの考えでは、経済学にとって最も重要なものは結局のところ歴史的経験であった。そのシュモラーの書物の扉には、ゲーテの次のような詩（『西東詩集』）がモットーとして掲げられている。

Wer nicht von dreitausend Jahren
Sich weiß Rechenschaft zu geben,
Bleib im Dunkeln unerfahren,
Mag von Tag zu Tage leben.

芳賀檀の訳によれば、「三千年来の歴史と対決できぬ者は／未熟な経験の暗闇にうごめき／その日暮しをするがよい」となる。これは挑戦的な文句であるが、この扉に書きつけられた杉村のもの

とおぼしき筆跡は、片仮名・平仮名を交じえていわく、「歴史家ニ非らずんは人ニアラザルか？」
杉村はシュンペーターを純粹経済学者のように見て、世界観を語る資格なしときめつけたが、じつはシュンペーターは歴史学派の精髓を継ごうとしたのであって、杉村はこういうシュンペーターとも袂を分かつのである。

(一橋大学経済学部教授)